

## シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

### 第4回

#### 第一部

#### ドイツの子どもの本の現在まで (要旨)

平成23年4月23日

講師：酒寄進一

#### はじめに

---

お招きいただきありがとうございます。終戦から65年間にわたるドイツの子どもの本の歴史をお話しします。リアリズム作品とファンタジー的な作品群という二つの柱があります。

#### リアリズム①戦後～60年代

---

先にリアリズム作品から紹介します。1949年に東西ドイツが分断された頃のドイツの児童文学には、子どものいじめ、肉親の死など、日本の児童文学が試みているのと同様のテーマが多くありました。しかし、自分たちが抱えたドイツの歴史を児童文学にどう書き込むかがドイツの作家の特色だと思うので、今日はそこに集中します。

日本で言う「戦争児童文学」なるものはドイツには存在せず、その代わり「ナチ時代の児童文学」という言葉を使います。つまり、戦争開始前からのナチによる独裁や迫害を全てひっくるめて、その中に戦争を位置付けています。

今日は『アンネの日記』東ドイツ版の初版を持ってきました。東西ドイツ分断の翌年、1950年に西ドイツで『アンネの日記』が出て、東ドイツでは遅れて1960年に出ました。この作品が出た頃は「戦争で我々はこんなに苦労した」と訴える児童文学が多かったのですが、この作品をきっかけの一つとして、ドイツ児童文学の中で戦争の描き方が決定的に変わりました。『アンネの日記』を読むまで、ほとんどの人たちがユダヤ人迫害について意識しておらず、児童文学にそういうことが書かれることは皆無でした。この作品が大作だと言われる前の1950年代にアンネのお父さんが訴訟問題を起こしたくらい、社会的に認められなかった時代がありました。アウシュビッツが本当に有ったのかどうかの公式裁判は1963年に始まり、2年ほどかかりました。つまり、終戦後16、17年もの間、公式にはよく分からない状態で語られていました。60年代の半ば頃、自分たちの過去や戦争に対するドイツの児童文学作家の姿勢が大きく変わりました。

#### リアリズム②：60～70年代

---

その先駆けとなったのが、ハンス・ペーター・リヒターです。『あのころはフリードリヒ

『**がいた**』(1961年)は名作中の名作なので絶対に読んでください。この人は1926年に生まれ、ヒトラーユーゲントに入り、1942年、言わば洗脳されて16歳で戦場に赴きました。この作品が書かれたのは終戦の16年後、戦争を知らない子どもたちが16歳になったときです。もう待ってられないという気持ちがあったのだと思います。彼はかつて戦争に巻き込まれ、そこに立ってしまった過去を書くことを決意し、この時代に公にしました。これは三部作で、その後戦場に行くまでの作品が書かれ、邦訳もされました。特徴的なのが、1960年代から70年代くらいにドイツで多数出たナチ関係の児童文学は、ほとんどが自伝か半自伝的なものだという事です。当時を体験した人たちが、自分の経験を言語化するという形で作品化しました。

その一つの典型が、オーストリアの作家**クリスティーネ・ネストリンガー**です。ハンス・ペーター・リヒターより少し若い世代ですが、戦争に巻き込まれました。自伝的な作品『**あの年の春は早くきた**』(1973年)はすごく良い作品なので、是非読んでほしいと思います。60年代の終わりぐらいから1970年代には、ドイツでも日本と同様に大学紛争がありました。戦争を知らない世代が、アウシュビッツ裁判から始まって50~60年代ドイツの経済復興を支えた自分の親たちが黙して語らなかつたことを知り、親たちの論理や倫理観を拒絶しました。そういう人々が「反権威主義的児童文学」(この言葉自体権威的で余り好きではありませんが)を名乗り、その典型がクリスティーネ・ネストリンガーでした。

### リアリズム③：80年代

80年代には、過去を知らない人々が過去の出来事を骨肉化しようとして文学に向かうという姿勢に変わりました。1943年に東ドイツで生まれた**クラウス・コルドン**は、その中の代表的な作家です。60年代末か70年代初めに西ドイツに亡命しようとして捕まり、約1年半収監された後、西ドイツに亡命して作家になりました。東西ドイツの両方を振り返る貴重な作家の一人です。

彼は、およそ三世代にわたる労働者の家族を用いながら、自分が生まれ育ったベルリンの街を点描しました。『**ベルリン 1919**』(1984年)で第一次世界大戦の終わった頃を、次の作品『**ベルリン 1933**』(1990年)でナチ政権時代を語り、三作目『**ベルリン 1945**』(1993年)ではベルリンが空襲で破壊されてロシア軍に占領され、地上戦に至るまでを12歳の女の子の視点から描写しました。

ドイツのリアリズム文学を考える上で、ベルリンの壁の崩壊は重要でした。60~80年代はナチズムの問題と向き合ってきましたが、壁が崩れてみると、実は東ドイツにもナチと同様、非常に危険な部分があったと分かりました。

### リアリズム④：90年代

90年代からは、ナチが何だったかではなく、なぜナチを否定していたはずの東ドイツが同じことをしてしまったのか、という問題意識に変わりました。それぞれが何をしたかという結果ではなくて、そこに至るときに人間はなぜそこにスイッチを入れてしまうのか。

こういう重い問題をドイツの作家たちは抱え、それを子どもと一緒に考えて考えようとする作品が出始めます。これは生みの苦しみです。知ってしまっただけには書けません。90年代前半、ドイツの児童文学は正直言って沈んだ時期があります。西ドイツの作家の多くは東ドイツを否定的に書いていましたが、否定する対象が無くなって書けなくなりました。東ドイツの作家たちは、自分たちの国はこうだったと知った瞬間書けなくなりました。しかも新しいビジョンが無いから更に書けなくなりました。90年代前半はかなり苦しい時代でしたが、後半に潮流が変わり、それがファンタジーに活かされていきました。

## リアリズム⑤：現在

最近では、**Wolfgang Herrndorf** (ヴォルフガング・ヘルンドルフ) の“**Tschick**” (2010年)という青春小説が非常に優秀です。少年二人が車を盗んで夏のバカンスを過ごしますが、行く先は人から忘れ去られたような東ドイツの田舎です。車が近寄ると銃をぶっ放すおじさんなど変な奴ばかり出てきますが、人情があり、なぜ彼らがいかれているかが見えてきます。壁が崩れて20年経ったところでプレッシャーのたがが崩れ始め、自由に子どもと考えながら、なぜあんな時代があったのだろうと考えさせる、という新しい試みが出てきました。

## ファンタジー①：50～60年代

ファンタジーに行きます。御存じのようにドイツにはグリム童話(これをファンタジーと呼ぶのは微妙ですが)という昔話の世界があり、その語りの伝統の延長線上にある作品が、非常に長くありました。もう一つ、ロマン派という文学潮流の中にある幻想(日本語でいうのは難しいですが)のようなものがあります。

50～60年代にかけてのドイツでは、牧歌的な作品が多かったと思います。一番典型的なのは**オトフリート・プロイスラー**の『小さい水の精』(1956年)、『小さい魔女』、『小さいおばけ』という3連作ですが、同時期に**ミヒャエル・エンデ**が書いた最初の作品『**ジム・ボタンの機関車大旅行**』(1960年)も非常に童話的な作品です。「見かけ巨人」という、遠くからだ巨人に見える小人が出てきます。皆怖がって近寄らないので、砂漠で孤独に生きています。この見かけ巨人の住む島はとても小さく、灯台がありません。小人でも立ってランタンを持ってくれば遠くの船からは巨大なランタンに見えるので、灯台の代わりになります。とてもいい場所に彼は居て、皆から感謝されます。ミヒャエル・エンデは初期には、本質的に人間に悪は無く、たまたま今居る場所が違うから認められない、自分が在るべき場所に居ればその人は幸せになり、周りの皆も幸せにできる、という理想論的書き方をしていました。

## ファンタジー②：70年代

70年代には反権威的児童文学が出て従来の価値観を否定しました。かつて児童文学ではタブーだった人の死、親の離婚などをストレートに書ける時代になりました。ただし、ファ

ンタジーは現実逃避的であると否定的に見られました。その時期に対抗するようにオトフリート・プロイスラーの『クラバート』(1971年)が出ました。ドイツのファンタジーでは避けて通れない素晴らしい作品なので是非見てほしいと思います。もう一つ、ミヒャエル・エンデの『モモ』(1972年)も出て、『ジム・ボタンの機関車大旅行』と違って「灰色の男たち」という徹底的な悪を否定しました。エンデの『はてしない物語』(1979年)では、更に変わって、内部に虚無を抱える自分を、芳醇な物語によっていかに豊かにしていくかがテーマだと思います。社会批判を児童文学にも要求した70年代を象徴するように、『はてしない物語』は79年に書かれました。

### ファンタジー③：80年代

この後、ドイツにファンタジーの大きな転換期が来ました。エンデの『はてしない物語』が大ブームになり、ドイツでファンタジーが市民権を得ました。80年代にはドイツのファンタジー作家がたくさん出始めました。ただ、『はてしない物語』の翌年(1980年)にトールキンの『指輪物語』のドイツ語版が出て、ドイツの作家はイギリスファンタジーの洗礼を受けました。従来からの民話や童話の延長線上の作品に加え、いわゆるハイ・ファンタジーを始めとする大きなドラマが出始め、加えてヒロイック・ファンタジー的な作品が山のように出始めました。その代表的な作家は、**ヴォルフガング・ホールバイン**です。デビュー以来30年で出版点数は400点に達しています。『メルヘンムーン』(1982年)は『はてしない物語』のパロディのような作品ですが、大ブームになりました。

### ファンタジー④：90年代

先ほど言いましたように90年代初頭、ドイツの児童文学は難産していました。ミヒャエル・エンデも大きな作品は書かず、95年に亡くなりました。この時期にエンデに見出されて出たのがラルフ・イーザウです。『ネシャン・サーガ』(1995年)の第1巻が95年に出ました。『盗まれた記憶の博物館』(1997年)は記憶が盗まれるという話で、『モモ』と重なる部分があります。この頃からドイツのファンタジー作家が新たにたくさん出てきました。

ドイツでは1998年に「ハリー・ポッター」シリーズの第1巻が出て大ブームになりました。日本では「ハリー・ポッター」ブーム後に多数のファンタジーが出ましたが、今は沈んでいるという印象があります。幸いドイツではドイツの作家が生き残りました。

### ファンタジー⑤：90年代 日本のアニメーションの影響

ドイツでは、1998年にベルリン映画祭に出品された『もののけ姫』が大ブームになり、数年後、ベルリン映画祭で金熊賞を受賞した『千と千尋の神隠し』が大ブームになりました。ドイツのファンタジーはイギリスのファンタジーに影響を受けていましたが、そこに日本のアニメーションの影響が入ってきました。日本のアニメの在りえない設定を受け入れるドイツの作家が増えたのです。代表的な作家の一人が、60年代生まれの**カイ・マイヤー**です。彼はブログで『風の谷のナウシカ』を絶賛しています。ドイツには、元々深い思想を織り込

んだ重厚な作品が多かったのですが、アニメの世界の発想の自由さ、遊びの要素が出てきました。

## ファンタジー⑥：00年以降 ドイツ児童文学最前線

---

コルネーリア・フンケは絵本作家でしたが、2000年代に入ってファンタジーを書き始めました。代表作は『魔法の声』（2003年）、『魔法の文字』（2005年）、3巻目はドイツでは完結していますが、日本語ではまだ出ていません。50年代生まれで、どちらかというところエンデに影響を受けています。

ジュニー・マイ＝ニュエンは、18歳でデビューした22歳そここの作家です。一作目の『ドラゴンゲート』（2007年）が出たところですが、お父さんがベトナム人で、お母さんがドイツ人のハーフだっと思いたいますが、見た目もアジア系で、ドイツの社会に居ながらかなりのアウトサイダー体験を子どもの頃にされたのではないのでしょうか、徹底的にアウトサイダーである主人公を書き込んでいます。今までのドイツのファンタジーにはなかったタイプで、彼女にしか書けないファンタジーを書き出しています。

もう一人、2009年から書き出している **Kerstin Gier**（ケルスティン・ギア）という女性作家がいます。日本でいう田辺聖子さんのような感じで、笑わせてくれて、ホロッとするような作品がある、ベストセラー作家です。彼女の、ラブロマンスで、お茶目で面白くて新しい、イギリスのファンタジーのいいところ取りをしたような三部作 **“Rubinrot”**（2009年）、**“Saphirblau”**（2010年）、**“Smaragdgrün”**（2010年）が2010年に完結して大ベストセラーになっています。

他にもまだまだ面白い作家をすぐに挙げられるぐらい、今ドイツはファンタジー盛りです。これが、ドイツ児童文学の最前線かなと思います。御清聴ありがとうございました。